

第27回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

平成二十九年第二十七回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

「看取り」を経験したからこそ

大沼 まこ (小五)

人も動物も皆、生きていく限り、少しずつ年をとり、いつかは最期を迎える。その最期をどう迎えるかは、まさに「命の尊厳」に向き合うことでもあるのだと心から思う。

私のような小学生で、「看取り」を経験したことのある人はそれほどいないだろう。看取りとは、単なる看病ではない。その人が天国に行くまで、そばでお世話をし、見守ること。その人が安らかな最期を迎えられるかどうかは、残された家族にかかってくる。

人は、誰にも迷惑をかけないで死んでいくことは出来ないということ、曾祖母の看取りを体験して私は知った。核家族が多い今、私の家はこの間まで、曾祖母を含め四世代が一緒に暮らす十人家族のにぎやかな家だった。祖母をおばあちゃんと呼び、曾祖母を「大つきいおばあちゃん」と呼んでいた。めったに風邪もひかない、「人一倍元気」が自慢の人だった。複数の詩吟教室をかけ持ちし、九十歳にして指導者として忙しく駆け回っていた。好きな物を食べ、好きな所に出かけ、好きな詩

吟を教え、「元気」を絵に描いたような人だった。大正生まれの大つきいおばあちゃんと平成生まれの私は、不思議なくらい気が合い、おしゃべりが弾んだ。幼かった私は、大つきいおばあちゃんのこの元気が、いつまでも続くものだと思っていた。

ところが、少しずつ体力が衰え、歩くのにも杖が必要になった。病院でみてもらうと、どこが悪いということもなく、「お年ですから」と言われた。足が弱くなると、次第に外出も減り、一人で出来ないことがどんどん増えていった。人は年をとると、今まで当たり前に出ていたことでも、出来なくなる。その現実を私達家族は、突きつけられる。幼い私にもその辛さが伝わってくる。ついには、誰かの手を借りないと日常生活ができなくなってしまった。普通なら、介護施設のような所をお願いするのだろうが、大つきいおばあちゃんは、みんながいるこの住み慣れた家で最期を迎えたいと言った。その願いを叶えようと、私達家族は団結した。在宅医療を支援してくれる先生の力も借りた。まさに梅原先生のような頼りになる存在だった。みんなで役割分担を決め、大つきいおばあちゃんを支えることになった。今思えば、私達のような大家族だから可能だったのだろう。それでも、祖母や母は何かと大変そうだった。明らかに疲労の色が表れていた。正直私は、いつまで続くのだろうと思った。でも誰一人愚痴も弱音も吐かなかった。桜を待ちわびていた大つきいおばあちゃんは、部屋から満開の桜を眺め、眠るように亡くなった。九十四歳だった。

「看取り」の経験をしたからこそ、梅原先生の伝えたかった「命の尊厳」を、私はしっかりと受け止めることができる。

大つきいおばあちゃんは、私達家族にとって、まさに大きな存在だった。

対象図書名 夜やってくる動物のお医者さん

大賞へ、審査員のひとこと

現在の高齢化社会の中で皆さんにとって大事な問題が切実に書かれています。曾祖母の「看取り」についてとてもしっかりと書かれています。だけでなく、曾祖母以外の家族のこともきちっと見ていて、家族で納得していく過程が私たちによくわかります。筆者自身の言葉で書いていることがよくわかるし、読み手に考えさせることを書いてくれていると思います。理想の家族であろうことが感じられる作品です。

受賞者のひとこと

「看取り」という言葉を聞いてすぐに思い浮かんだのが、曾祖母を家族みんなで世話した頃のことでした。当時まだ幼かった私は、祖母や母にその頃の様子を詳しく聞いて、この作文を仕上げました。今でも、家族みんなで食卓を囲むたびに、曾祖母のことが話題になります。曾祖母はニコニコしながら私たちの会話を聞いているような気がします。今

回の受賞も自分のことのように喜んでくれていると思います。こうして、曾祖母の事を作文に書き、あの頃を思い出すのも、曾祖母の供養になると思うので、私にとってもこの「大賞」受賞は、一生忘れられない特別なものになりました。

本を読むたびに、いろいろなことを考えます。今回は、「命の尊さ」でした。それは、今生きている私たちが、生きることを大切にすること、一生懸命生きることでもあるのだと、私は気づきました。二年連続で「大賞」をいただくことができても光栄です。ご指導して下さった先生、受賞と一緒に喜んでくれたセミナーの仲間、そして私の毎日を応援してくれる家族、みんなに「ありがとう」と言いたいです。

小学生低学年の部・最優秀賞(小三)

みてろよ父ちゃんを読んで

新家 知磨

「みてて！お父さん」

ぼくが、ようちえんのうんどう会で鉄ぼうのさか上がりがせいこうするのをお父さんに見てもらいたかったことを思い出しながらこの本を読んだ。

主人公のアキヨシは、うんどう会の日、ときようそうで一番になれる自信があつたが、父ちゃんは、しごとがあつたので見に来てもらえなかつた。だから、アキヨシは、がんばつてもしかたないと、母ちゃんに言った。ぼくもアキヨシと同じ気もちになると思う。うんどう会のために、一生けん命練習したのに、お父さんに見に来てもらえなくなると、悲しくて、うんどう会に行きたくないと思うだろう。でも、父ちゃんが言ったかっこいい言葉が、矢のようにぼくの心にささった。

「いいことや、いいしごとは、だまってするもんだ。それをじまんするように言つたりすると、とたんにうすつぺらなものになつちまう。」

ぼくは、この言葉を読んだ時自分がはかしくなった。ぼくは、いいことをした時に、

「これ、ぼくがやつたんだよ。」

と言つてしまうからだ。でも、これからは、いいことをする時は、だれにも言わずにできるようなかっこいい人になりたい。では、今のぼくにどんないいことができるかなと考えてみた。

ぼくの学校のたんにんの先生は、今、おなかの中に赤ちゃんがいる。だから、ぼくは、先生のためにおてつだいができることがあるのではないかと考えた。たとえば、先生が重い物を持っていたら、自分からすすんで持つてあげたいと思う。その後、今までのぼくなら、家に帰ると、

「今日、先生のおてつだひしたよ。」

とじまんしたくなるだろう。でも、アキヨシの父ちゃんの言葉を思いだ

して、ぐっとこらえようと思う。そして、クラスのみんなにも先生のためにおてつだいをしようと思ひかけたと思う。先生がよろこんでくれる顔をそうぞうするとワクワクしてきた。

先生の赤ちゃんが元気に生まれてくる日を楽しみにしながら、ぼくが出来ることをたくさんみつけておてつだいをしようと思う。

「早く先生の赤ちゃんに会いたいな。」

対象図書名　　みてるよ！父ちゃん！

受賞者のひとこと

コンクールで最優秀賞を取つたと聞いてすごくびっくりしました。

もともとぼくは作文が得意ではありませんでした。でも、「がんばれ父ちゃん」を読んだときに「父ちゃん」がすごくかっこいいと思いました。

「父ちゃん」のようにかっこいい人になるためにはどうしたらいいかを考えて、感想文を読む人にぼくの気持ちがあつてもらえるように書くうと思ひました。

担任の先生は九月からお休みで、十一月に赤ちゃんが生まれるそうです。先生とおなじ元気な赤ちゃんが生まれるといいなと思ひます。

小学生の部・最優秀賞（小四）

なみだの穴が来る前に

竹本 昴 泰

うれしいなみだ、悲しいなみだ、なみだの穴ってどっちなのだろうと気になった。時間の流れが反対になっている不思議な本だなあと思ったら、最後まで一気に読んでしまった。どの話も全部どこかでつながっていた。出てくる人はみんな色々な事がまじったり、一生けん命がんばっていた。だから心が風船みたいにふくらんで、パンパンになって、ひびが入る。最後には、破れつしそうになる。その時、どこからか不思議な穴がやってきて、なみだがあふれて止まらなくなる。穴は掃除機のようにしんどいものを全部吸いこんだ。すると今度はスッキリして、素直になれるし、前に進んで行けた。

なみだの穴はなぜ、なみだをこらえている人の所へ行けるのだろうか。あ、そうか。人はみんな見えない糸でつながっているんだ。その糸が心を通っているから、なみだの穴が必要な人の所へ飛んでいけるんだ。ぼくはどうか。まだなみだの穴は、来てないと思う。けれど、なみだをこらえたことはたくさんある。たとえば、逆上がりができない時、ゲームで負けた時、いやな言葉を言われた時だ。そのたびに、心に傷がついて、テープでとめる。ぼくの場合、楽しいことをすると、きずがよくな

って、テープをゴミ箱に捨てられる気がする。それに、家族に言うと、傷を包んでくれて、温かくなって、悲しい気持ちがなくなる。だから、ぼくの心はパンパンにならないし、なみだの穴もこないんだ。でも、少し心配になってきた。もしかして、ぼくのなみだはお母さんにたまっているのかもしれない。そう思ったら急に、ドキドキしてきた。そういえば、泣く時もおこる時もわらう時も、全力投球なお母さんだけれど、最近のお母さんは静かだ。座っているとところなんて見たことがなかったのに、たまに横になるし、体中にシツプがはってある。もしかしたら、家のすぐそばに、なみだの穴があるのかもしれない。見えないからこわいな。その瞬間、ぼくはお母さんにハグをしていた。少しおどろいたお母さんは、ニコツと笑顔になった。よし、この調子でお母さんのなみだの穴を追い出してやる。ぼくが絶対に、お母さんを守るぞ。

この本を読んで、がんばる事は大事だけれど、がまんはしすぎないこと。はつきりと本当の気持ちを話すこと。そして、心を元気にすること。心がけようと思った。

対象図書名 なみだの穴

受賞者のひとこと

ぼくは、三年生の四月から塾に通っています。作文を出すのは今回が二回目、去年は優秀賞までいきました。選ばれるとは思っていません

たので、びっくりした気持ちと、表彰式まであと一步の所で選ばれなかった残念な気持ち半分半分でした。今回最優秀賞までいったと聞いたとき、「ついにやった」と、心の中はうれしきでいっぱいになりました。本の題名を見て、すぐにこの本にしたいと決めましたが、難しく、最初は上手に書けませんでした。自分の思いを沢山紙に書き出して、その中から多くの強く伝えたい気持ちを選んで作文にしました。表彰式は佐賀県で、うれしい気持ちもありましたが、「行ったことがない所だし、みんな見ているので失敗しないかドキドキするなあ。」と不安です。でもこの本から不安な気持ちをためない方法を知ったので、今は大丈夫です。式の日を楽しみに待っています。

小学生の部・最優秀賞(小五)

かくされた気持ち

森 脇 美 友 貴

なみだの穴なんて、あるはずがない。この本を読み始めたとき、私はそう思った。なみだの穴は、泣くのを我慢している人のところに流れてきて、なみだを流させる不思議な穴だ。しかし、そんな夢のような穴があればいいなど、本を読み進めていく内に、そう思うようになった。

私も、この本の登場人物のように、泣きたいのを我慢することがある。例えば、勉強で、難しい問題があった時、なげやりな態度をとってしまったら、母に叱られて思わず泣きたくなることもある。しかし、すぐに泣いてしまうと、本当に反省してないと、母に思われるのではないかと考えて、なみだをこらえている。他にも学校で理不尽なことをクラスメートに言われた時も、泣きたくなる。だが、泣くとその相手に負けたことになるので、グッと我慢している。そんな時、私は心の中では、とても悲しい気持ちになっている。この我慢したなみだは、どこに行くのだろう。私は、なみだの穴に吸い込まれていくのだろうと思った。私は小さいころは、よく人前でも泣いていたと思う。しかし大きくなるにつれ、人の目を気にするようになり、我慢することが多くなった。それは、成長したとも言えるが、自分の本当の気持ちをかくして生きているといえる。この本の登場人物のように、笑っていても心の中では泣いていたり、平気そうな顔をしていても深く傷ついていたりと、人は大人になるにつれ、本当の感情を素直に表わせなくなっていくのだと思う。そのようにして我慢したなみだがたくさんたまっていき、あふれた時に、なみだの穴は現れるのだと思う。

私も時々、まるでなみだの穴を見てしまったかのように大泣きすることがある。それは、家族もおどろいて、もう泣かないでと言うくらい的大量のなみだだ。泣いた後は不思議なほどスッキリしている。ということは、なみだの穴は本当にあるのかもしれない。

私だけではなく、他の人も自分の本当の気持ちを我慢しているのだと思う。怒っている母や、私に文句を言ったクラスメートにも、かくしている感情があるのかもしれないと思うようになった。母は、あまり感情を表に出さない。一度、母に「どうして、なみだを流さないの。」と聞いたことがある。その時母は、「一度泣いてしまうと、そのままなみだ が止まらなくなりそうで怖いから。」と答えた。それで母にも、かくしている感情があったのだと気付けた。そうすると、私に文句をいつてきたクラスメートも許せるようになった。

これからは、人の表面の感情にとらわれるのではなく、かくしている本当の感情に気付いてあげられる人になりたいと思った。

対象図書名 なみだの穴

受賞者のついで

私は、塾の先生に、受賞を知らされたとき、とても驚きました。まさか自分の作文が選ばれるとは思っていませんでしたからです。

この作文を書いた時、私は塾の夏期講習中で、塾に行っていない小学生の同級生がうらやましかったです。楽しそうでいいな、私は勉強したり、テストを受けたりしているのにも思っていました。ですが、この本を読んで同級生たちにも、表には出せない辛いことや悲しいことがあるのかもしれないと考えられるようになりました。自分の中にある嫉妬や怒り

など、マイナスの感情が軽くなったように思います。最初は「なみだの穴」なんて、ただの想像だと思って読んで本ですが、この本を読むことができて良かったです。これからも「なみだの穴」のように、自分の考えを、改めさせてくれるような本に出会いたいと思いました。

小学生の部・最優秀賞(小六)

自分の気持ちは表に出そう

四本 瑠海

口から声を出すということと、自分の感情を表情で伝えること。どちらも、大切なことの一つだ。

私は、よく「できない。」と言ってしまいくせがあった。でも、どうしてすぐ、自分の限界の線を引いてしまうんだろう。疑問に思う。それは、心のどこかに、やめたいという気持ちがあったからだと思う。新田選手と同じだ。新田選手も、心の奥底では、金メダルをとってきれいにスキ―をやめたいという思いがあったと言う。でも、この本を読んで自分のことを、考えることができた。もし、挑戦しようという気持ちがあったら、「できない。」なんて、一言も口に出さないだろう。

逆のこともある。何か、うれしい時や、成功した時に、ついつい「やったー。」や「よっしゃー。」など、勝手に口から言葉が出てくる時は、ないだろうか。ゲームで勝った時などは、まだまだやりたいという気持ちに、なるだろう。そうやって、口から言葉を出すことで、人に自分の気持ちを伝えることができるし、心の中で喜ぶより、喜びが倍になると思う。

喜ぶということは、もっと上を目指すために、やる気がわいてくる。そうやって、人は上へ上へと成長していくのだろうと私は考える。

他にも、「人は泣いて成長する。」という言葉聞いたことはないだろうか。私は、祖父から、この言葉を習った。この言葉を耳にした時、疑問に思った。「人は泣いて成長する。」ではなく、「人は笑って成長する。」のではないかと、今考えると、どちらも正解だと、私は思う。新田選手も、ぼくに、何が足りなくてメダルが、とれなかったのだろう。でも、今だから分かることが、できるんだと。メダルを目の前に、あそこで転んだから、自分の心と体は成長できたと語っている。

また、泣く時は、ただ流れで泣いているわけではないと思う。私は、毎回、原点に戻って、何がいけなかったのか、反省をしている。反省とは、次に生かせるから良いと思う。だから、「人は泣いて成長する。」と言うのだろうか。

その考えとはちがって、その時の私は、笑うということは、おたがいに、喜びを分かち合い、みんなで成長することができる考えた。なの

で、「人は笑って成長する。」のではないかと感じた。どちらも、生きる上で、大切なことだと言える。

なぜなら、人間は感情を持っている動物だからだ。感情はコントロールすることができる。コントロールすることで、自分の個性を発揮している。まさに、十人十色だ。

新田選手も、たくさん仲間と出会い、笑い、泣き、怒り、悲しんだことが大切な宝物だと言っている。自分の気持ちを、上手く表現することで、もっと世界が明るくなる。

受賞者のひとこと

私が、「最優秀賞を取った」ということを聞いた時は達成感や、嬉しき、驚きなど、さまざまな気持ちらが重なっていて、声が出なかったぐらい、興ふんしていました。

そこで、作文を書いて思ったことや、気づいたことが、いくつかありました。

一つ目は、「不可能とは可能性だ」を読む前と、読んだ後の大きな、気持ちの変化です。読む前は、文字が小さい上で、多いし、ページ数が大きかったことから、そこまで興味はありませんでした。でも、実際に読んでみると、新田選手の考え方と同じ部分があったり、新田選手の熱い

対象図書名 不可能とは、可能性だ

心情で、読み終わる区切りがつかなくったです。ここで、この本の主人公・新田選手の積極的で、あきらめない性格だからこそ、自分の思いをしっかりと持って、伝えることができる人だろうと思ひ、自分の気持ちはしっかりと伝えようということを、テーマにした作文にしようと思ひました。

この機会を通して、自分の気持ちを持つこと・伝えること・考えてみるということの大切さを、この作文で、より多くの方々に知っていただけたら嬉しいです。

中学生の部・大賞

当たり前なんかじゃない

金岡 勇磨 (中二)

僕には、一つ違いの姉がいる。幼稚園、小学校、中学校と同じ学校に通っているの、周りの友だちや先輩たちからも、「えっ、二人は姉弟なのか。」と、よく言われる。周りがそう言うので、僕は知らず知らず、姉を意識してしまっているのかもしれない。僕が姉の弟としてこの世に生まれてきた時、僕は千八百五十六グラムしかない低出生体重児であった。約二か月間、NICUと言う病棟の保育器の中で育てられ、生まれて二か月も家族と離れて暮らしていた。そしてようやく、僕が姉と対面できた時、姉は二歳の誕生日を迎えていた。低出生体重児だった僕は、退院してからも、いろいろと規制があったらしい。たとえば、弱視にならないように、直射日光に当たってはいけないかった。だから、一日中、部屋の中で過ごしていた。僕につきっきりの母は、当時、外遊びをしたくてたまらなかつた姉に、「弟のために我慢してあげてね。」と言ったそう。それから、僕は肺機能が発達していなかつたので、担当の医師から、「できるだけ泣かさないようにしてください。」と言われていたらしい。だから、母は僕が眠っている時は、姉とできるだけ静かにしていたという。

まだ二歳になったばかりの姉は、僕に母親を奪われた上に、外にも遊びに行けず静かにするように言われて、どんな気持ちだったのだろうか。

その頃の事を、母は時折僕に話をしては、「お姉ちゃんが居てくれて、よかったね。」と言う。

この本に登場する、姉のミラと弟のザック。ミラが弟を想う気持ちの深さに感動するとともに、僕も自身の姉を誇らしく思いながら、本を読み進めた。

スキリー・ハウスという児童養護施設には、いろいろな問題を抱えた子どもたちがいた。何より僕の心に残ったのは、その子どもたちが家族を必死に追い求めていたことだ。僕は今まで、家族は居て当たり前のように感じていた。僕にとって家族とは何だろう。改めて考えてみた。僕は今、卓球部に所属している。強くなりたいと思い、一生懸命に練習しているが、勝てる日ばかりではない。うまくいかなかった日は悔やしきもあり、家に帰るのもわずらわしく感じることもある。しかし不思議なことに家族と居ると、また元気を取り戻すことができた。決して小学生の時のように、学校であった事を家族にあれやこれやと話すわけでもないのに、心の緊張が緩んでいく感じがして、家族はまるで、僕の充電器のようだと思う。人にとって家族とは、体だけではなく心の居場所なのではないか。そんな居場所を、ミラとザックの姉弟やスキリー・ハウスで暮らす子どもたちは、探し続けていたのだろうか。

スキリー・ハウスの院長であるミセス・克蘭クスのことを、ミラは

冷たい人だと感じていた。しかしその冷たさは、愛した子どもたちとの別れの時に感じる辛さを、少しでも少なくするために、ミセス・克蘭クスがとった行動であったのだ。

僕にもこんな経験がある。それはまだ僕が小学校低学年の頃、一人で宿泊学習に参加した時の事である。同じ班には、県内のいろいろな小学校から集まった人たちがいて、初めて会う人ばかりであった。六年生の一人の男の子は、みんなで活動していてもあまり話すこともなく、僕は少し苦手だなと感じていた。しかし、その日の夜、その男の子と部屋で二人だけになる機会があり、勇気を出して話しかけてみることにした。話をしていくうちにその男の子も僕と同じように、初めて一人で参加した宿泊学習に、不安な気持ちで一杯であるのだとわかったのだ。お互いの気持ちを話したことで、宿泊学習が終わる頃にはその男の子と僕は、一番の仲良しになっていた。目の前に居る人の行動を、どのように感じるかは分からない。しかし、その行動の裏にはどのような事情があるのか分からないという事を考えながら、人と接する事が必要だと思う。

自分が子どもの頃過ごした児童養護施設で自分と同じように家族のいない子どもたちの世話をしようと思ったミセス・克蘭クスのことを素晴らしい人だと僕は思う。僕も、もう十三歳。十年後には仕事に就き、社会のために働いている年齢だ。その時、僕も彼女のように、自分の経験の中からやりたいと思う仕事を見つけないかと思っている。そのためには、恐れずいろいろなものに挑戦していく勇氣を持ち続けたいと思う。

そして何よりも、そんな僕を精一杯支えてくれている家族に感謝の気持ち
を忘れずに、今ある事が当たり前だと思わずに、一日一日を大切に
していきたい。

対象図書名 青空のかけら

大賞へ、審査員のひとこと

自分の中に満ちてきた思いが堰を切ったようにわき出しています。自
分の言いたいことをまず言わないと、という思いがあつて、それがとて
も新鮮に感じました。表現も魅力的でテーマも深く多岐に及んでいます。
すべてそれらを自分で引つ抱えていく、というエネルギーを感じました。
ひとつひとつを整理すれば、まだまだ書けると感じます。

受賞者のひとこと

今年の夏、読書作文をきっかけに僕は一冊の本と出会った。その本と
の本との出会いから、僕は改めて家族という大切な存在について、認識
することができた。普段は何気なく過ぎ去っていく毎日が、一冊の本を
読むことによって、この上なくかけがえのないものに感じることができ
たり、今まで気付かなかった真実に辿り着いたりすることができた。本
は人生を面白くすると思う。

また、本を読み自分の生活を振り返り、心で感じたことを素直に言葉

に表すことの素晴らしさを知ることができた。その作文を評価していた
だけ、名誉ある賞を受賞できたことに感謝し、これからも、たくさんの
本に触れ、心を磨き続け、自らを輝かせていきたいと思う。

中学生の部・最優秀賞(中一)

愛をつないで

川合 杏奈

自分では抱えきれない程の辛さを抱え込んだ時、人はそこから逃げた
いと思うだろう。その苦しみを忘れるために、何かにすがろうとするだ
ろう。自分の居場所を求めて。俊はゲームの中に逃げ込んだ。ネットに
夢中になることで、弟のことを忘れようとしていたのだと思う。このま
まではダメだと自分で分かっているけど、どうにも出来ずに苦しんでいた
俊の気持ち、私には痛いほどよく分かる。

自分のせいで誰かが不幸になってしまうのは、自分が直接痛みを受け
るよりも、はるかに辛いことだと思う。俊の場合、自分の投げたボール
のせいで弟が事故にあり、亡くなったのだから、自分を責めずにはいら
れなかったのだろう。自分のせいで家族がバラバラになってしまったと

思い込んでいたのだから。いっそのこと、自分が犠牲になれば良かったのにと、泣きじゃくった場面では、私も思わずもらい泣きをしてしまった。私の妹の事件と重なったからだ。

私は四姉妹の三女として生まれた。二人の姉達とは年が離れているので、私が生まれた時は両親はもちろん、姉達からも大いにかわいがられた。みんなの愛情を一身に受け、常に家族の中心にいたのはこの私だった。その幸せがいつもでも続くものだと思っていたが、五年後、妹の誕生によって全く違う空気になってしまった。みんなの関心は、いとも簡単に私から、生まれたばかりの妹に移ってしまったのだ。その時私は、「お姉ちゃんになる」喜びより、末っ子の座を奪われる寂しさの方が強かった。正直私は、ずっと末っ子でいたかった。「お姉ちゃん」になんか少しもなりたくなかった。誕生した妹の小さな動き一つ一つに、みんなが笑顔になるのを横目で見ながら、私だけが素直に喜ばずにいた。

そんな私の心を知らない妹は、私にいつも笑顔を見せてくれていた。私にいつも優しくかった。よちよち歩きが出来るようになってからの妹は、私が落ち込んで泣いていると、小さな手で私の涙を何度もぬぐってくれた。小さな手で私の頭を何度もなでてくれた。私の顔をのぞき込んで、笑顔で私を慰めてくれた。いつも優しさにあふれ、私の小さな妹はまるで天使のように愛らしかった。その天使の笑顔に私は何度も救われ、元気をもらうようになった。いつのまにか、いじけていた私の心も妹によって清められていったのだった。

心を入れ替え、姉らしくしようと思っていた矢先、二歳になったばかりの妹に大変なことが起きた。最初は風邪ぐらいにしか思っていなかったが、高熱が続き近くの病院に入院することになった。治るどころか、症状が悪化するばかりで、その病院では対応しきれなくなり、さらに専門の病院に移ることになった。救急車に乗せられた苦しそうな妹を見た時、私は恐怖で押しつぶされそうになっていた。普段よく目にする救急車は、今まで他人事ではなかった。まさか自分の妹が運ばれていくなんて考えてもみなかった。一体、妹はどうなるのだろう。私には、ただただ不安と恐怖しかなかった。

検査の結果、難病と言われる「川崎病」と告げられた。全身の血管で炎症が起きて発症する病で、治療も難しいということだった。面会謝絶の状態が長く続いた。なぜ原因不明の病に妹がならなければいけないのか。妹がこんな事になったのは、全部自分のせいだと思った。私が妹の誕生を素直に喜ばなかったから、妹がこんなひどい目にあってしまった。悪いのは私なんだ。俊と同じように、毎日自分を責めていた。妹ではなく、私が病気になるべきだったのにと、責め続けていた。もし、妹がもう二度とこの家に帰って来なかったらどうしよう。悪い事ばかり考えて、私は誰にも心を打ち明けられずに、泣いてばかりいた。俊のように、それを忘れるための逃げ場所も私にはなかったのだ。

ようやく面会が出来るということで病室に行った私は、妹の姿を見て打ちのめされた。そこには、手足の皮が赤くむけ、ガリガリにやせた、

見るからに弱々しい妹が横になっていた。変わり果てた妹の姿に、私は言葉も出なかった。神様は、かけがえのない妹の存在に気付かせようと、私にこんな試練を与えたのだろうか。今もそう思わずにはいられない。

俊のおばあちゃんの言葉が忘れられない。「人は皆、愛されるために生まれてくるんだよ。」——確かにそうだ。俊も弟も、私も妹もみんな。自分がみんなに愛された分、その愛を今度は妹や弟に注いでいく。その順番が当たり前なんだと、今なら素直に思える。

今、私の妹は小学二年生。元気に学校生活を送っている。時々私に生意気なことを言うようになった。そんな、どこにでもある当たり前のことが、とても嬉しく思えてくる。

もう、弟に会えない俊の分まで、私は妹を守っていいこうと思っている。姉として。

対象図書名 ケンガイにつ！

受賞者のひとこと

小学二年生で入塾した私は、毎年このコンクールに参加してきました。賞の大小にこだわらずに全力を尽くすこと。それが先生の方針なので、誰もが一生懸命考え、がんばるのが当たり前という環境にありました。この恵まれた環境の中で、先輩たちの活躍に刺激を受け、自分自身も成長できたように思います。これまで三年連続で「優秀賞」をいただ

けたのをとても光栄に思っていました。でも、毎年のように上位の受賞者が出るセミナーの中で、やはり私もいつかは大きな賞が取れたらという気持ちもありました。今回、念願叶って「最優秀賞」をいただくことができ、うれしさと達成感でいっぱいです。

両親はもちろん、今回の作文の中心人物である妹も、この受賞をとっても喜んでくれました。作文を仕上げるまでには、悩み考える時間も多けれど、今、それも含めて文章を書くことが楽しいと言い切れる自分があります。これからも大いに本を読み、のびのびと作文を書いていきます。いつも情熱あふれる指導をして下さる先生と、刺激を与えてくれるセミナーのみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞(中二)

約束したはずだった

千 田 陵 太

「いつまでやってんの。いい加減にしないと没収するよ。」

毎日のように我が家に響き渡る母の怒鳴り声である。勿論僕に言ってる言葉で、僕が言わせてしまっている言葉である。僕は中学入学と同時に

らいに、数々の約束をさせられて、やっとの思いでスマホデビューをした。

①部屋には持ち込まず、リビングで使用する。

②時間のルールを守る。

③成績が落ちた時は取り上げる。

約束はした。でも正直今思えば、スマホを手に入れる為の約束であって、守れると思ってした約束ではなかった。そんな中でも最初の頃は、取り上げられない様に母の顔色を伺うかの様に約束は守った。約束を守る事が、スマホを守る事になっていたからだ。それが二年目になる今では、リビングで使いはするが母の声が騒音でしかないのでイヤホンを使用している。母が話しかけてもすぐに返事はしないし、聞き返して怒られる事もある。そろそろ母も本気で怒って来る頃かもと感じる事も多い。僕も彼とまではいかないが、依存症なのかもしれない。依存症だと言われるのも、口では否定するが、心では否定出来ないのだ。

スマホデビューをする前の修学旅行の時を思い出した。あの時は、早く家に帰りたい。早く帰ってご飯が食べたい。ベッドでゆっくりと寝たいと思いつつは帰ったはずだった。それがスマホデビューをした今では、母の「おかえり。ご飯食べて早く寝ないとね。後で色々話を聞かせてな。」なんて言う声をスルーして、自分の部屋にスマホを取りに行く。帰ってお腹はすいているが、ご飯でもなく、疲れているが、寝る事でもなく、何よりも先にアプリゲームをしたかった。彼と同じように、僕がスマホ

が使えない環境に行くなんて考えられない。一日でも絶えられないと思う。きっと僕だけではない。僕の周りの友達もほとんどがスマホを持っている。毎日寝不足の友達、遅刻する友達、テスト前に没収され文句を言う友達、そんな僕達が、彼と同じ様な経験は出来ないだろう。夏休みを利用してやれと親に言われたらと思うと恐怖でしかない。彼は嫌々行った田舎ではあったが、田舎暮らしを経験していく中でゆっくりではあるが変わっていった。スマホ、パソコンなんて無縁の生活、人は当たり前前の生活にあった物がなくなっても、それなりの生活が出来るんだ。今当たり前前である環境も、自分が当たり前前と信じきっているだけで、決して当たり前前ではないのだ。両親が働き買ってくれる物もあって当たり前前なんかではない。もちろん家族がいなくなるなんて考えた事はないが、彼は違った。彼は小さな弟を亡くすという経験をした。いて当たり前前の家族が突然いなくなるなんて誰しもがこの年で経験しない事を経験したのだ。弟の死をきっかけに依存症になってしまったが、僕はどうだろう。ただ、楽しいからと自分の欲望を抑えられず、身勝手に甘えた生活を送っているのだ。あって当たり前前、そこにいて当たり前前なんて事は決してないのだろう。今ある毎日に感謝し、優しさであったり、有り難みを持たなければならぬのだ。

彼は夏休みの田舎生活で、昔の自分を取り戻し、見違える様になった。人との触れ合いで変わる事が出来たのだ。僕は断然今の彼の方が温かみあるかっこいい奴に見える。僕に彼と同じような田舎暮らしは不可

能だが、出来る事もある。

僕は何を守るべきなのかを改めて考えた。三つの約束を守る条件で与えてもらったスマホだったが、今ではスマホを守る為はその約束を覚えているだけの様な気がする。これは違う。まずは、自分が守ると言った約束をしっかりと守らないといけないのだ。学校生活でのルールや、決まりといった事が絶対だという事なんて、いつからか身についている。やらないと怒られるからでもある。そんな事よりも、自分が守りますと言った事を簡単に忘れてしまっていた事を人として恥なければいけない。この夏で僕は大切な事を思い出せた。約束は守らなければいけないという事だ。

対象図書名 ケンガイにつ！

受賞者のついで

僕は塾に小学三年生から通っています。毎年読書感想文を書く為だけに、本を読み宿題をこなすだけでした。その上国語も苦手な僕だから、このように審査を進みましたと言われてもまさか最終審査までいき、最優秀賞を取れるなんて思ってもいませんでした。今回の事で色々な方々から「おめでとう」と声をかけてもらいました。僕の人生今まで「おめでとう」は言われる事より言う方が多かった為、こんなに嬉しく誇らしい言葉であることを知りました。これからはもっと心をこめて使おうと

思います。あと一回、読書感想文を書きますが、来年はどんな本に出会えるか今から少し楽しみです。

中学生の部・最優秀賞(中三)

生きる事に向き合う

黒川 紗那

障がい者に対する理解や支援の輪は私達の身近でも少しずつ広がっている。ある日の早朝、茨城県沖での地震の際テレビの報道の仕方に今までと違う変化があった事に気付いただろうか。「つなみ、にげる」と全て平仮名で大きく表示されていた。私は何で平仮名なのか母に聞いた。自身も難病と戦いながら障がい者も含めて就職の支援の仕事をしている母は、色々な法律にも詳しい。大きく表示するのは聴覚障がい者への配慮、平仮名で表示するのは知的障がい者への配慮だそう。ちょうどこの年の四月に施行された障がい者差別解消法の中の合理的配慮にあたるそうだ。合理的配慮とは、障がいのある人が障がいのない人と平等に人権を受け行使出来る様、個別の調整や変更で柔軟に対応する事だ。行政や企業は可能な限り合理的配慮を提案する事が求められる。

確かに健全な人と比べると生きていく上で困難な事に出くわす事は多い。多いと言うよりも困難でない事の方が多い。以前母が股関節の炎症がひどく歩行しにくかった際、車椅子で過ごした事があった。スーパーと一緒にいった時、少し車椅子に座ってみた。興味本位だったが、ほんの十センチの段差でも乗り越えるのに相当腕力がいった。商品をかごに入れるのでさえ、ちよつと高い位置にあると手が届かない。荷物が落ちても取れない。これは大変な事だと思い知った。

では障がいのある人は弱者なのだろうか。新田選手の周囲は可哀想だと出来ない事に借すのではなく、どうやったら出来る様になるかを考えた。新田選手自身も腕がない事を理由に負ける事を嫌い、努力を惜しまなかった。そうして夢を掴む事が出来たのだ。本当は言い訳したっていいはずだ。だって体が不自由な事は事実なのだから。母ももつと休んだっていいはずだ。だって体調が悪いのは避けられないのだから。でも彼らは決して諦めない。元氣な私よりよつぽど強い気持ちを持って、まさに毎日「全力」なのだ。そんな人を前にとても弱者とは言えない。でもなぜそこまで無理をするのか、なぜそんなに頑張れるのか。なぜみんなそんなに強いのか。

今回の読書をきっかけに母の本音を聞いてみた。するといつもの様に家族がいてくれるからとか、病気に負けるのが悔しいからとはぐらかした。私は「私も十五歳になって、色んな事を頑張らないといけないけど、本当は何の為になるのか、新田選手や母の様に倒れるまで頑張る理由が

分からない。その秘密を教えて。」と真剣に聞いた。私の必死さに観念したのか、母は病氣になった時の事から話してくれた。まだ一歳だった私が抱っこをせがんでも両手首が激痛で抱っこできなくて不甲斐なくて泣いた事、参観日に具合が悪くて見に行けなかった事、車椅子に乗ると周囲の視線が私にも注がれている気がして申し訳ないと思った事。そして、大量の薬を飲んでなるべく普通に近い形で生活するのと引き替えにその副作用は骨や内臓をボロボロにしている、いつその病変が出るか分からない事。自分が普通に過ごせる期限があるからこそ、この時間を精一杯生きたい。逆にみんなには元氣な体や心があるなら、それを存分に活かした一生にして欲しいと。

障がいや病氣だから頑張れないではなく、障がいや病氣だから頑張れるでもない。人が自分の状況を見つめ、生きていく事の目標をしっかりと持ち、その為の努力を負まずに生きていく。それが強さの秘決だと感じた。

いや、ここではあえて障がいや病氣があるからこそ頑張れると言おう。元氣な私は生きる事がどんなに困難で、どんなに素晴らしいかなど、考えた事もなかったから。人は困難に直面して初めて元氣でいる事のありがたみを感じる事が出来るのだ。私は自分を何も分かっていなかった。生きるという事と向き合う事を初めて実感した。ちつとも努力が足りない自分、頑張ってるつもりの方が情け無く思った。

中学最後の独唱声楽コンクール。私は今まで以上に歌った。徹底的に

研究した。そして、カロラツチョ（イタリア語の愛の歌）を、いつも支えてくれる母の為だけに歌おうと心に決めた。自分の為ではなく。結果は何と、優勝。県中学生で一位。今でも信じられないが今まで一番力の抜けた、最高の歌が歌えた。やっと恩返しが出来たと思ったら、母の顔を見た途端涙が止まらなかった。

今までにない位努力して必死に向き合うと結果はもちろん、気持ちも最高に充実してすがすがしい気分だった。この本に出会え、自分に気付き、もつとがむしやらに、目標を持って、本気で誰かの為に、前へ前へ。私のこれからの人生、とことん生を感じて生きる事に向き合おうと心に決めた。

対象図書名 不可能とは、可能性だ

受賞者のついで

「努力は必ず報われる」そんな言葉があるが、この夏私は身をもって体験する事が出来ました。私は歌を習っているのですが、今まで歌に關してはそんな言葉は嘘だと思うことも多々ありました。でもそれは努力が報われるのであって、私がしてきた事はまだ努力と言えるには足りなかったのでしょうか。今まで夏休みにこの読書作文コンクールに挑戦すること六年、作家審査に三回、最優秀賞一回、最後の年に二度目の最優秀賞を頂く事が出来ました。何度も下書きを書き直した事、何度も読み返

した事、大変な作業だったけれどやればやるだけ良い文章が出来上がる事が楽しかったです。私の人生の中で十年後、二十年後も夏になれば、読書感想文を頑張ったと思いつける経験となりました。この経験を活かして今後の困難も努力で乗り切っていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

第27回(平成29年度)全国読書作文コンクール

優 秀 作 品 集

平成29年10月 発行

発 行 公益社団法人 全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail info@jja.or.jp

